

事例レポート ③

介護・福祉関連事業を通じた地域交流の場づくり

株式会社特殊衣料
代表取締役社長 池田 啓子氏



病院・福祉関連のクリーニング業として創業し、現在、施設清掃、商品の開発・製造・販売・レンタルの一貫体制を構築しながら、産学官連携による保護帽アボネットがヒット商品に。福祉用具の体験型ショールーム「はっさむ快護ひろば」は、周辺学校の総合学習の場だけでなく、地域高齢者の交流の場としても開放・運営されています。

福祉用具体験型ショールーム「はっさむ快護ひろば」

1979年の創業時から布オムツなどのクリーニング業を通して病院スタッフとの接点があり、医療現場のニーズを直接聞くことができ、精神科病院からは、袋状のシーツや食事用の前掛けなどを特注で請けて製品化し販売しました。1986年には、介護用品のショップを札幌市中央区の行啓通りに開きました。1994年にはシルバーランドさっぽろとして移転・名称変更し、さらに、2001年に隣接地を購入、あらたに福祉用具の体験型ショールームとして「はっさむ快護ひろば」をオープンしました。

はっさむ快護ひろばでは、お年寄りや身体にしょうがいのある方が、朝起きてから寝るまでの不自由さを体験できると同時に、そのときに必要な福祉用具を手に取り、使ってみることができます。この疑似体験コーナーのほか、介護用品・設備などの相談に応じたり、介護教室や総合学習、医療系の学校の研修をおこなうなど、さまざまな用途ではっさむ快護ひろばは利用されてきました。

また、道内外の福祉用具製造メーカーの商品説明・講習の場としても使われています。特殊衣料は場所の

提供だけではなく、関係者への声かけや参加者集め、福祉用具専門相談員の立ち会い・説明のサポートなどを通し、幅広い異業種交流の場としても、活用されています。

高齢者の憩いの場「はっさむいきいきサロン」

そんな中で、特殊衣料では、知的障がい者通所授産施設「ともに」や地域活動支援センター「ともに」を開設しました。ともに学び、ともに働いている障がいのある方たちのことを地域の方たちに知ってもらい、はっさむ快護ひろばを拠点に交流も深めてもらいたいという思いで、'05年に高齢者の生きがい学習会やレクリエーションなどの交流の場として、はっさむ快護ひろばを開放することにしました。現在、「はっさむいきいきサロン」という名称で運営されています。

いきいきサロンではボランティアによる運営委員会が組織され、札幌市のシニアモデル事業の指定も受けました。手打ちそば体験や布遊び、習字・琴・シャンソンなどのプログラムがあり、多くの方々のご参加を募っています。毎月、運営委員会が開催され、行事スケジュールを決めて皆さんに告知しています。

運営委員会へは札幌市から補助金が出ていますが、会社も場所を提供するだけではなく、職員が運営のお手伝いをし、資金支援を行っています。

ご協力いただいているボランティアさんの熱意に後押しされて、2年が経過しましたが、当初から問題だった集客数は、微増ではありますが常連の方も増えてきています。気長に、気負わず続けることで地域に浸透していくことを信じています。ボランティアさんが気持ちよく活動していただけることが、お客さまの居心地につながると思っています。



はっさむ快護ひろばといきいきサロン「そば打ち体験」

利用者とメーカーの橋渡し…みんなに支えられて

福祉用具の業界にはいろいろなメーカーがあります。扱っている商品も多様で、利用者には種類が多過ぎて、使用方法や、品質の違いなどがすぐ理解できないし、購入した後で体に合わないとかの不都合なことが起こっても、返品が難しいものが多いのが現状です。そこで、体験型ショールームでは、購入前に手にとってみたり、使ってみることができます。札幌に営業所がないメーカーの製品でも、特殊衣料で説明や貸し出し等の業務を代わって行うことにより、利用者や卸業者とメーカーの橋渡しや、利用者の相談コーナーの役目を果たしています。

今年、特殊衣料は、北海道内のある企業の社員懇親のパークゴルフの会に呼んでいただきました。先方の会社の幹部の方に「特殊衣料との付き合いは親戚以上だ。何かのトラブルがあってもすぐ飛んできてくれる」との言葉をいただき、感激したことがあります。多くの会社や大勢の皆様を支えられて、仕事をいただいていることを忘れてはなりません。

今まで社会貢献をしようと思って企業を経営してきたわけではありません。ただ人様との縁で仕事をやらせてもらい、地域の人々にも支えられて、会社でできることを一所懸命取り組んできただけなんです。それを社会貢献とっていただけるならありがたいことだと思っています。

新たな製品開発への挑戦

わが社で初めて全国に通用する保護帽「アボネット」の開発に取り組んだときには、行政や大学の先生、デザイナーや職人さんなど、いろいろな人にお世話になり技術や知恵をいただきました。もちろん、会社は周りから技術や知恵をいただきながらものをつくっていくことには変わりはありませんが、アボネット開発で、職員全体に「自分たちにもやればできる」というモチベーションが上がりました。企業としては、一流の商品をつくっていこうという自信と意欲を持てるようになったことが大きな財産になりました。

今は、アボネット開発の経験を生かして、プロジェクトチームをつくり新たな製品開発に挑戦しています。疑似体験セット「まなび体」という製品で、高齢者や体の片側がまひした人の体の機能や心の変化の一端を学ぶための学習用機材です。

当初は学習用機材として開発したのですが、小中学校には予算がなくさっぱり売れませんでした。その頃

開発に協力してくれていた社会福祉協議会の方が応援していただき社会福祉協議会が購入し、小中学校に貸し出すシステムが出来ました。今では道内の大学、専門学校はもとより全国の医療介護系の教育機関で採用されています。

現在、企業の研究開発や職員研修などで導入するところが増えてきており、私鉄大手、タクシー会社、自動車メーカー、電機メーカーなど日本の様々な有名企業が購入しています。これからの製品づくりはユニバーサルの視点から製品づくりをすることが求められており、わが社の疑似体験セットを導入して製品開発に当たっているのです。まなび体が製品・環境をつくる側と利用する側相互の心をつなぐ橋渡しのようなものになればと願っています。これまでアボネットは6000個以上、疑似体験セットは1000セット以上売れています。

福祉の企業は原点に帰る時期にきています。介護保険制度のスタートでたくさんできた福祉企業は淘汰されつつあります。金額の低いものでも、お客様一人ひとりに手間ひまかけてお届けするという時代に戻ってきていると思います。

株式会社特殊衣料

<http://www.tomoni.co.jp>



疑似体験セットまなび体



アボネットのコサックタイプスタンダードとクロスエタイプ